

---

# コロシコロサレコロスカヒ

立花 潮美

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

コロシコロサレコロスカヒ

### 【Nコード】

N1282BA

### 【作者名】

立花 潮美

### 【あらすじ】

殺したい、と願う少女。

殺されたい、と願う少年。

そんなふたりの出会いは、必然だったのかもしれない。陰と陽、白と黒。ふたりはおたがいに正反対であったがゆえに、その心をすこしずつ重ねていく。

ところが、そんなふたりの周囲で事件が起こりはじめる。その余波が、すこしずつふたりの周囲にも押し寄せてきて……。

高校生の少女と少年が織りなす、シンプルなショートストーリー。

## プロローグ

わたしはひとを殺したいの。

どうしても？

ええ、そう。どうしてもよ。この手で、この体で、確実に殺さないといけないの。

どうして？ 何のために殺すの？

自分を生かすために、殺したいの。

ああ、それは良い理由だね。

ありがとう。

他のやりかたでは、うまくいかない？

だめだわ。無理ね。

他の手段を、確かめてみた？

ええ、それはもう、ひと通りね。

本当に？

わたしだって、バカじゃないつもりよ。色々と探してみたし、試してもみたわ。

たとえば、どんな？ 教えてもらっても、いいのかな。

話してあげても良いけど、なぜ聞きたいの？

ぼくにとつて、それはとても大事なことから。物事の過程は重視されるべきだ。

なんで？ そんなに過程が大切かしら？ 結論よりも？

だって、死という結論は同じでも、殺されかたの過程は数多くあるよね？

ああ、わかったわ。あなたは、どう殺されるか、を気にしているのね。

うん、その通り。わかってもらえて嬉しいよ。

なあるほど、それならOKよ。教えてあげても良いわ。でも、ここじゃイヤ。

ううんと、他の人に知られてしまうのが、いやなのかな。

わたしは心の秘密を、これから死ぬ人以外に見せるつもりはないの。

了解した。じゃあ、捨てアドを教えるから、それにメールをもらえるかな？

良いけど、この掲示板にアドレスを公開するわけでしょ？

知らないひとが、いたずらでメールを送ってきたらどうするの？  
わたしだって、わかるかしら？

わかるよ。だって、ぼくは殺されたいのだから。

ああ、素敵なお答えね。わたし、ドキドキしてきちゃった。

## 第一章 ころしたいの ( 1 )

すでに、残されている時間は少ない。頃志摩潰煉ころしま くれんは、そう確信していた。

今こうして、黒板の文字をノートに黙々と書き写している間にも、『それ』はガン細胞のように彼女の身体を蝕みつつある。

これは、失われていく感覚だろうか？

それとも、壊されていく感覚だろうか？

いや、違う。本当に怖いのは、そんな感覚ではない。もっとも忌むべきことは、気づかないこと。知らないうちに、こっそりと置き換えられていること。

毎朝、鏡を見ている自分には、少しずつ起こっている変化はわからない。

『しばらく見ない間に、潰煉ちゃんはずっかり大人になったね』  
久しぶりに会う親戚から、そんな言葉をかけられたとき、潰煉はすさまじいまでの戦慄を覚える。自覚がないまま『大人』という別の生き物に、潰煉はなりつつある。気がつかない間に、いちばん大切なものが汚されつつある。

すぐに止めなくてはいけない。一分一秒を争う事態になるかもしれないのだ。だからこそ、殺さなくてはいけない。たしかに、その行為は許されないのだろう。

「別に、構わないけど」

潰煉は、あっさりと口にした。

その様子を見た友人の已足内心いたりだいしんが、ショートカットの髪をわずかに揺らしながら、潰煉よりも頭ひとつぶん高い長身をかがめたまま、いそいそといった感じで自分の椅子ごと近づくと、胸に抱え込んでいたお弁当箱を、潰煉の机の上に置く。

潰煉は、かるく首をかしげてから訊いた。「心、どうしたの？

お昼休みに、お弁当を一緒に食べるのは、いつものことじゃない。

わざわざ訊かなくても良いのに」

「それはココロのセリフだよ」心が、上目遣いで潰煉の顔をそっ  
と見つめた。「だって、カレンちゃん、今日ちよっと変じゃなあい  
？」

潰煉も、鞆から自分のお弁当箱を取り出す。「そう？ 別に何も  
ないけど」

「なら、いいけどお……。あ、そうそう、今日の放課後ね、つきあ  
つてくれない？ あのね、駅の向こうに、新しい小物のお店ができ  
たみたいなの。だからね、ココロは行ってみたいな。かあいいの、  
いつばあいあるみたいだよ」

潰煉は、ご飯を飲み込んでから言った。「今日はダメかな」

「えー、どうしてえ？」心が、たこさんウインナーをもぐもぐしな  
がら訊く。

無表情で潰煉は答える。「どうしても、よ」

「あ、カレンちゃん、やっぱり変なお」心はまだもぐもぐしてい  
る。

「そんなに变かしら？ そういう風に言われると、あんまりうれし  
くない」

「え、でもお、なんかウキウキしてるように見えるの。なにかいい  
ことあったあ？」

気づかれないように、よどみなく箸を動かしてから、潰煉は嘘を  
ついた。「何も」

心は何か言いたそうな顔をしていたが、二個目のたこさんウイン  
ナーに箸を伸ばすと、体を丸めて再び上目遣いに潰煉を見ている。  
心は、潰煉よりも縦に長い体型をしているので、その体勢が潰煉に  
はひどく窮屈に見えた。

短めの髪といい、スレンダーな体型といい、外見はボーイッシュ  
な感じなのに、心の拳動や言動はひどく女の子っぽい。腕にはめて  
いる時計も女兒向けのキャラクターもので、どう考えても似合わない  
のに、心は外そうとしない。口では祖母の形見だから、などと

っているが、あやしいものだ、と潰煉は思っていた。

「どうしても、今日はダメえ？」心が、捨てられた子犬のような目で友人を見つめる。

視線を、窓から見える空の方にそらして、潰煉は答えた。「どうしてもよ。ひとりじゃダメ？　ひとりで行くと、何かまずいの？」

「ほら、だつてブツソウだし」「心が目をうるうるさせている。

潰煉は目を細めた。「ブツソウ？　物騒なの？　そういう場所にあるお店なの？」

「うーん、そうじゃなくて。ほら、サツジンハンが居るからあ」

殺人犯、という言葉に、はじめて潰煉が箸を止めた。「なんで、急にそんなことを？」

「だつて、例の連続殺人事件が起こってるの、陰惨市内だよ？　近くだよ？　ココロ、ひとりは怖いなあ」心がおびえる子犬のような顔をしている。

たしかに陰惨市内では、心の言う通り、いささか奇妙な連続殺人事件が発生していた。

殺人は市内の各所で行われ、そして死体そのまま遺棄されている。

どうやら殺害方法はすべて同じらしいのだが、被害者に共通項がないので、通り魔的な犯行ではないか、と新聞やニュースでは報道されている。加えて死体の損傷が激しいこともあり、猟奇的な要素もあるのではないか、とも噂されている。

潰煉の記憶が間違いでなければ、一週間ほど前にも、とある公園に死体がひとつ転がっていたはずで、新聞やテレビは大騒ぎになったものだった。

だが、心はちょっと大袈裟ではないか、と潰煉は感じていた。

「近く、つていうけどさ。事件が起こってるのは、陰惨市の、けっこう広い範囲でしょ？　事件の現場になってる場所は、この高校がある墮胎町からは、ずいぶん離れてたはずだわ」

「あ、意外なの。カレンちゃん、ずいぶんと詳しいんだね」



余計なことを言ってしまった、と潰煉は内心で舌打ちをした。殺人事件に興味を持っていることを、友人の心には知られたくなかったからだ。

「ごめん、でもやっぱり、今日はひとりで行ってね」

すこし強引に、話を戻す。大切な約束があることを悟られないよう、潰煉は最大限に表情をコントロールした。

心は子供っぽいくせに、妙なところで勘の良さを見せることがある。時々、根拠もないの的を射た指摘をしたり、潰煉の頭の内側を容赦なく覗き込んだりしてくる。そういうことには慣れていたはずだが、今日はその状況は避けたかった。

潰煉はしばらくの間、黙々とお弁当を食べ続けた。

「ぶつう」心が、顔の下半分を思い切りふくらませて抗議した。

最後の授業が終わるやいなや、頃志摩潰煉は鞆を抱えて外へ飛び出した。

あたりに注意を配りながら駅まで歩くと、いつもとは違う方向の電車に乗る。誰にも見られなくなかったから、潰煉は歩いているとき以上に、周囲を警戒した。

隣の駅で隠れるように電車を降りると、すべるような足取りで目的地へと向かう。

陰惨市内でも有数の繁華街である駅前は、他校のものとおぼしき学生服の姿であふれかえっていたが、潰煉の通う高校の指定はありふれたブレザーだったから、まるで木を森に隠すようなものだった。相手が学校帰り、制服のままでの面会を望んだのも、もっともなことだ、と潰煉は納得した。へたに私服でうろろするよりも、よほど目立たないだろう。

やがて潰煉は、その足をとめた。右手に持っているプリントアウトした地図と、自分の周囲にある風景とを、しばらく交互にながめた後で、ひとつ大きくうなずく。

そして意を決して、目の前にある喫茶店へと入っていった。

約束の喫茶店に入った潰煉は、店内をさりげなく見渡した。そこも学校帰りの制服姿であふれていたが、駅前の雑踏とはあきらかに雰囲気がちがっている。

二人用の席が多く存在していて、ほぼすべてに男女のペアが座っていた。席と席のあいだには、観葉植物が置いてある。

店そのものの落ち着いた雰囲気といい、おそらくはカップル御用達の店なのだろう。内緒話をするには、もってこいな感じだった。そんな中で、ゆるやかに動いていた潰煉の視線が、ぴたりと止まる。

潰煉の目は、驚くほど自然に、ひとりの男子生徒に向けられてい

た。

どこにでもいるような、普通の少年。中肉中背、髪型も地味。雰囲気も大人しい感じだったが、その目だけがひどく透き通っていた。自分の意思で歩くのではない、そんな不思議な感覚をおぼえつつ、潰煉の足は滑らかに動いて、その男子生徒のいるテーブルの前で止まった。

「こんにちは」

その男子生徒が、ゆっくりと顔を上げた。その表情に驚いた様子は見られない。

少年が潰煉を見つめていたのは、そんなに長い時間ではなかったが、目の前にいる少女が、掲示板で言葉をかわした相手だ、と確信したようである。

「やあ、こんにちは」男子生徒が、静かに答える。

「頃志摩潰煉です。はじめまして、の方が良かったです？」

「どちらでも。でも、せつかくだから、はじめまして、と言うよ。おっとりとした口調で男子生徒が付け加えた。「贅望削途です。とりあえず、まず座って」

言われた通り、潰煉は削途の前に座った。二人に挟まれたテーブルは店の窓際にあり、そこからは表を歩く人並みが見わたせた。ありがたいことに、外からは店内の様子がわかりにくいようになってる。

近づいてきたウエイトレスに、潰煉はレモンティーを注文した。せつかく透き通っている琥珀色の液体を、ミルクで濁らせたくなかったからだ。一方の削途は、すでに半分なくなりかけているブラックのコーヒーを口に運んでいる。

「もしかして、待った？ 五分遅れちゃったし」

「いや、すこし先にきただけ。それに、待つのは慣れてるから」静かな口調で応じると、削途が穏やかな笑みを浮かべた。「頃志摩さんとは違って、ぼくの方は待たねばならないから。ある意味、ぼくの人生そのものが、ずっと待っているようなものだよ」

うなずいて、潰煉も笑みを返す。「潰煉、って呼んで。みんなそう呼ぶから」

「では、そうさせてもらうよ。その代わりに、ぼくも削途って呼んでほしい」

潰煉は、あたりさわりのない言葉を選んだ。「なかなか、良い感じのお店ね」

「気に入ってもらえて、良かったよ。本当は、もっと人気のないところにしようか、とも考えたんだ。ただ、それだと女性である潰煉さんに、無用な警戒心を抱かせてしまうかもしれない、と思ったものでね」削途が、声も表情も柔らかい感じで言った。

小さくうなずいた潰煉の視線は、削途の左手の側、つまり窓側に向けられた。テーブルの上に、地味な装丁の小さな冊子が乗っかっている。

興味津々で、潰煉は訊く。「それ、スケッチブック？」

「うん、たまに絵を描いているんだ。友人に勧められてね。いまも描いて待っていた」

ひとこと断ってから、潰煉は削途が描いていた絵をのぞきこんだ。中央に描かれた直線が、テーブルの横にある窓から見える道路であることは、潰煉にもすぐにわかった。

現実と違うのは、大型のトラックが歩道に突っ込んで、大勢の通行人を踏み潰していることだった。もちろんその多くは学生服姿で、絵の中で見るも無残な姿を晒していた。おそらくは血を表しているのだろう、ペンの黒いインクが道路いっぱいに広がっている。ところどころ、インクが大きな塊になっているのは、飛び散った肉片を表現しているのかもしれない。

潰煉は正直な感想を述べた。「素敵な絵ね」

「ありがとう」削途が恥ずかしそうに微笑む。

数瞬ののち、潰煉は小首をかしげた。「でも、ちよつと意外。そういう趣味もある人？」

「え？ ……ああ、たぶん、勘違いをしているね」今度は、削途が

にっこりと笑った。「ぼくが居るのは、このトラックの下の方だよ」  
潰煉は二度まばたきをした。「なあるほど。もしかして、そういうのが理想？」

「うん、そうなんだ」

「すり潰されて、死にたいの？」もちろん周囲に人が居るから、潰煉はささやくような口調になる。「こなごなに、跡形もなく？」

「ちがう」削途が静かに首を振る。「死体のあり方に興味は無い。それは結論だから」

その言い方で、潰煉にも削途の意思が読み取れた。

「あなたは、事故に遭いたいのね。巻き込まれて殺される、そんな死を望んでる？」

「うん、その通り。きわめて理想的な死に方だね」

潰煉はすこしだけ、削途に顔を近づけた。「正直なところ、どうやって話を進めようか、迷ってたのだけど、こんな自然にやりとりができて驚いてるの」

「まあ、それは、掲示板である程度はお互いのことを知っていたからだね」

「素晴らしいわ。時間を浪費せずに済むから」潰煉は微笑む。「まず、わたしの方から訊いても良いかしら？」

「良いよ。レディ・ファーストだからね」

「どうして死にたいの？」

潰煉は単刀直入に訊いた。婉曲さのかけらもないその質問の仕方は、潰煉に余裕がないことの表れでもあったが、もちろん潰煉自身は、そのことに気づいている。

「自分の人生を、シャットダウンしたいからだよ」はっきりと、しっかりとした口調で、削途がどこまでも冷静に応じた。

「迷いのない削途の答えを聞いて、潰煉は嬉しくなった。「続けて」「簡単に言うと、ぼくの人生には、快樂よりも苦痛の方が多い、と理解できたから。だから、生きていても仕方がない、って思えるんだ」

まるで、ひとごとのような口調で削途が続けた。

「生きることは、つらく、苦しいことだ。喜びや楽しみは、少ししかない。そのごくわずかな快樂で、苦痛をごまかしながら過ごしているだけだ。ぼくたちの世代は、将来に希望はない、と思う。未来には不幸しかない以上、いまここで自分の人生をやめても、構わないと思うんだ」

潰煉は大きくうなずいた。

「その考え方に近いものは、なんとなくわかるわ。自分をとりまく環境が、どんどん悪くなってのを、肌で感じるから。じつは今がピークで、あとは坂道を転げ落ちてくだけ、そんな感覚がわたしにもあるもの」

「ピークでさえ、この有様だからね。将来は本当にろくでもないよ」「ええ、その通り。未来に希望なんてない。それにこんな風に感じてる以上、きつとピークは中学の頃だったのかもしれない」

潰煉は天をかるくあおぐと、その顔を削途へと向きなおした。「ああ、あなたのお話を聞いてみて、もうひとつの質問が我慢できなくなってきた」

「遠慮は要らないよ」削途が笑った。「ぼくの方は、いくらでも時間があるから」

「じゃあ訊くけど、どうして自殺をしないの？」

潰煉は、真正面から削途の透き通った目を見すえた。

「削途さん、話を聞く限りでは、あなたはすでに死ぬ覚悟はできてるんでしょ？ 自分を自分で殺すのが、もっとも手っ取り早い、と思うんだけど」

予想された質問だったのだろう、削途の返答はよどみなかった。

「うん。それはもちろんそうだ。潰煉さんの言うことは正しい。でも、ぼくは自殺をすることで周りの人に迷惑をかけたくないんだ。

これでも親や友達が、一応いることにはいるからね」

削途が再びコーヒを口に含んだ。その液体は、何も入れなくても黒く濁っている。潰煉の視線にうながされるようにして、削途が

言葉を続けた。

「自殺をしたら、どうなると思う？ きつと、親や友達は、責任を感じてしまう、と思うね。親であれば『育て方が良くなかったかもしれない』とか『接し方が悪かったせいにながいない』とか、そんなふうに、苦しんでしまうかもしれない」

削途がティースプーンをくるくると回した。

「あるいは友達であれば『なぜ自分に相談をしてくれなかったのか』とか『どうして気づいてあげられなかったのか』とか、そんなふうに、悩んでしまうかもしれない」

削途の右手がスプーンを回し続ける。

「ほかにも色々と考えられるけど、あげればキリがないかな。つまり、ぼくが自殺をすることで、彼らは自分自身を責めてしまうかもしれないわけだ。そうやって、無実の他人に罪悪感を覚えさせるのは、ちよつと、はた迷惑だと思うんだ」

削途が、いったん言葉を切ると、表情を少しあらためた。

「もちろんこれには、多分にぼくの『悲観的』観測も含まれているけど。ぼくが自殺をして、『さつさと死んでくれてせいせいした！』とか『あいつがいなくなつてバンザイだ！』とか、そんなふうに考えてくれるのであれば、それはきわめて『楽観的』だね」

潰煉は、ふむふむ、とうなずいた。

「……つまり、自殺という行為をすることが、周囲に影響を及ぼす、と？」

「うん、そう思う。少なくとも、周囲に居る人たちにとっては、良い意味の影響はないよね。そしてそれは」

削途の視線が、道路を走るトラックへと向けられた。走り去るトラックに、どこかなごり惜しそうな視線を向けながら、ぼそり、という感じで、削途がつぶやいた。

「美しくは、ない。汚らしい人生を歩んでいる以上は、せめて死ぬときくらいは綺麗でありたい、と願うよ」

口を閉ざしたとき、削途の瞳は、ひときわ澄みきっていた。

潰煉は、その瞳を覗き込むようにして応じる。

「なあるほど。だから、事故死というのが、あなたにとっての理想の姿なのね」

「その通りだよ。事故で死ぬことができれば、親や友達には責任を感じずに済むから。そういう意味では、人災よりも天災の方がより好ましいね。死の責任を、ほかの誰にも押し付けようのない状況が良  
い」

削途が、両手をひろげて、少しおどけてみせた。

「極端なことを言えば、空から隕石が降ってきて直撃死、なんて最高かもしれない。親や友達には、隕石を責めたり告発したりはしないだろう？ 周囲にいる人たちは、それだけぼくの死を容易に受け入れることができるわけだね」

潰煉は再びうなずいた。

「なんとなく、わかっただわ。あなたの考え方」

「それは……ちょっとずるいかな。ぼくのことばかり、話しているような気がするよ」



ウエイトレスがレモンティーを運んできたので、ふたりの会話は中断した。

頃志摩漬煉は、琥珀色に透き通った紅茶をひとくち飲んだ。

レモンのかすかな酸味が、漬煉の感覚を刺激する。贅望前途の視線が、自分の方に向けられるのを待ってから、漬煉は言葉をつむいだ。

「わたしの方は、すごくシンプルなの。結論から言ってしまうば、自分を変えるキツカケ、が欲しかっただけ」

「それは、自分を生かすキツカケ、という意味？」

「ううん、どちらかと言えば、死なないようにするためのキツカケ。なんて言えば良いのか、言葉で説明するのが難しいわ」

漬煉は目をつぶると、慎重に言葉を選び始めた。

「……ええと、わたしはね、ゆるやかに死んでくのがイヤなのよ。いえ、ちがうわ。死ぬのが怖いんじゃない。わたしがいちばん怖いのは、自分の心が、汚されてしまうこと。穢される、いいえ、つくり変えられる、改悪される、と言った方が良いかもしれない」

漬煉は目を閉じたまま、かるく顔をしかめた。

「……汚れた精神をもったまま生きてくのは、それはある意味で精神的に死んでることと同義だから、そういう感覚では死ぬのを恐れてる、と言ってもよいのかもしれないわ」

漬煉は小さく何度も首を振った。「ああ、うまく説明できない。自分に腹が立つわ」

「落ち着いて。ぼくは待っているからね」削途の笑みがどこまでも優しい。

漬煉は目を開くと、両手を胸に当てて訴えた。

「……ねえ、わかってほしいの。わたしが感じてるのは、強い危機感なの。せっぱつまってるのよ。小学校や中学校のときに感じてた

違和感とか、納得いかない気持ちとか、そういったものが、高校生になつたいま、薄れてきてるわ。ずっとおかしいと思つてたもの、絶対に許せないと感じてたものを、いまでは、仕方がないものだ、そういうものだ、って考えて、なんとなく受け入れてしまつてる。受け入れることを、当然のことのように感じることをさえあるわ」

削途が、おつとりとした調子で応じた。

「きみが言いたいことの趣旨は、理解できているつもりだよ。自身自身の個性とか、自分特有の感性とか、そういうものが失われていくこと、それを恐れているんだね」

「そう、なのよ。時がたつにつれて、どんどん、自分自身というものが無くなってくみたい。それは汚れていつてるのかもしれないし、穢されていつてるのかもしれない。それが、大人になる、ということなのかもしれないけど、そんなのはイヤなの。このままでは、わたしは普通の大人の仲間入りをしてしまう。そんな自分自身がとても恐ろしくてたまらないの。ううん、なんて言えば良いのかしら…」

「お茶を、ひとくち飲んでごらん」削途が、みずからもコーヒークップを持ち上げて口へと運んだ。「妥協すること、甘受することが、受け入れられないみたいだね」

潰煉は大きくうなずいたあとで、小さく手を振った。

「あ、でも勘違いしないでね。他人の正しい意見を聞くのは、別に構わないのよ。ただ、洗脳させられるのは、イヤなの。それにいちばん怖いのは、わたし自身がそれを人のせいにしてしまうことなのよ。苦痛を感じてるのは『学校のシステムが悪い』とか『家庭環境が悪い』とか、何かに押し付けて、自分自身の責任から逃れようとしてる……」

「それはつまり、他人に責任を押し付ける、他責の考えということ？」

「そう、そうよー！」

声が大きくなってしまったのに気づいて、あわてて潰煉は声をひ

そめた。

「まさにその通り。そういう考え方をする人間にだけはなりたくないの。絶対にイヤ。そんなことになるくらいなら、死んだ方がまだマシよ」

「周りに、そういう他責の考え方をする人が居るんだね。たとえば、親とか？」

潰煉は、早く小さく息を吸い込んだ。

「さつきから……薄々とは感じてただけけれど、削途さん、あなた頭の良い人よね」

「そんなこと、ないよ」削途が静かに首を振る。

潰煉の顔は、すこし赤くなっていた。

「嘘。ちがうわ。受け答えを聞いてればわかるもの。あなた、わたしの言いたいこと、瞬時にまとめてみせてるじゃないの。わたしなんか『殺したい理由』を訊かれる、ってわかって、昨日の夜から、一生懸命どうやって説明するか考えてたのに、このざまだもの」

「ぼくが自分のことをうまく説明できたのは、潰煉さんの訊き方がじょうずだったからだし、ぼくの抱えている理由がきわめてバカげていたから、かもしれないよ」

潰煉はため息混じりに主張した。

「あなたがバカなら、わたしは大バカ、になっちゃうじゃないの。贅望削途は頭が良い、ってことで良いんじゃない？ それにあなただの制服、梅毒高校のものでしょ？ 梅毒高校なんていったら、このあたりでは有名な進学校じゃない」

「進学校かどうかなんて、意味のないことだよ。少なくとも、人の生とか死にはあまり関連のない、どうでも良いことじゃないかなあ」

潰煉に軽くいらまれた削途が、苦笑まじりに言うと、手のひらを顔の前にさしだした。

「さあ、気にしないで、先を続けてほしいな」

「……どこまでお話ししましたっけ？」

「他責の考え方はイヤだ、というところまで」

「そう、そうよ、そうだったわね。わたしは、ゆるやかに汚染されてくこと、知らないうちに穢されてくことを恐れたわ。そこで、なんとかするために、自分自身を変えるしかない、と思ったの。何かをキツカケにして、生まれ変わるしかない、と思ったわ」

ふたたび削途にうながされて、潰煉は紅茶に口をつけると、乾いた唇をうるおした。

「自分を変えたい、そのキツカケがほしい。そのキツカケは、普通の経験ではダメだったわ。非日常的で衝撃的な体験をして、一気に自分の殻を突き破ってくしかない、と思ったの。それを求めてどんどんと進んでいって、究極的に、それは禁忌に踏み込むことではないか、という結論にたどりついたの。そしてその答えのひとつが、人を殺す行為だった」

潰煉の赤い舌が、ちろちろと動いて、みずからの下唇をなめた。

「知らないうちにつくられた『理性という殻』を壊して、内側に秘められた本能を解き放ち、本当の自分自身を体現する。それこそが必要なことであり、殺人行為はそのきっかけとして、まさに相応しい行為だ、と思ったわ」

「うん、うん」削途が繰り返しうなずいた。「殺したい、という潰煉さんの結論は理解できた、と思うよ。ありがとう。……じゃあ今度は、そこに至るまでの過程が聞きたいな」

潰煉は、満足そうに微笑んだ。

そのあとで、形の良いあごに手を当てたまま、潰煉は首をかるくひねった。「掲示板でもそうだったけど、削途さんは、結論よりも過程にこだわるのね」

「まあ、それはそうだね。理由を説明した方が良いかな？」削途がまじめな顔で訊いた。

潰煉は、ふたたび微笑んだ。「ぜひ、お願いするわ」

「うん、了解したよ。理由はふたつあげられるね」削途が胸の前で腕を組むと、手の指を一本立てた。「まずひとつ目は、結論よりも過程の方が重要なのは、当然のことだからだよ。ために具体例を

あげてみようか。たとえば『人を殺してしまった』という結論があるでしょう」

削途が、ゆっくりと、落ち着いた口調で続ける。

「このとき『完全に偶発的な事故で死なせてしまった』のと『ついカッとなってうっかり殺してしまった』のと『はじめから計画して相手を殺した』のでは、三つとも結論は同じでも、ずいぶん状況がちがうよね？ 殺意の有無についてもそうだし、罪の重さについても、ちがいが出てくると思う。これは、結論よりも過程の方が重要である、ということ、如実に表している事例だ、と言えると思う」

ちいさくうなずいている潰煉に、うなずきを返した削途が、二本目の指を立てた。

「ふたつ目は、結論だけを追い求めて、地獄を見てしまった知り合いがいるからだね」

潰煉のからだだが、すこし前のめりになる。「地獄？ くわしく聞かせて」

「別に潰煉さんに当てつけるつもりはないから、怒らないで聞いてほしいのだけど……」

削途の左手が、コーヒークップを持ち上げる。

「むかし、死を望んだ少年がいた。彼はぼくと同じように、殺してくれる相手を探していて、そして見つけた。彼は、自分の望みを叶えようとした。でも実際には、その相手は殺す気などはまったくない、ただのサディストだった」

沈黙を保っている潰煉を見て、削途がコーヒークップをひとくちすすつた。

「彼が発見されたとき、両手両足は、すでに使い物にならなくなっていた。両目もつぶされていた。たぶん、今でも彼は病院にいる、と思うよ、芋虫のような姿だね。歯もすべて折られていたから、舌を噛んで自殺することもできなかつたみたいだ」

削途がカップの中にある、黒い液体の底の方を覗き込むようにし

た。

「……まあ、かわいそうだけど、彼自身にも責任はある。彼は、相手の過程を調べておくべきだった、ぼくはそう思っている。動機と目的だけではなく、その途中経過をきちんと確認していれば、相手が、ただの変態的なサディストであることは、分かったはずなんだ」  
そこで言葉を切ると、削途がさぐるような視線を、潰煉の顔に向けてきた。

「最初にことわったけど、潰煉さんに当てつけるつもりはないからね。すこししか話していないけど、潰煉さんはそんな人ではないと感じている。まちがないなく、きちんと人間を殺すことのできる覚悟を持った人だ。それは確信に近いものがあるよ」

「うれしいわ。ありがとう」  
「どういたしまして」

潰煉が表情をゆるめてみせたので、削途は安心したようである。  
カップを傾けて、すっかり冷めてしまったコーヒーの、最後の残滓を飲み干した。

しばらくのあいだ、静かな時間が流れたあとで、潰煉は慎重に口をひらいた。

「わたしの過程を話すとすれば……そうね、わたしは、自分は簡単に変わるもの、そう思ってたの」

潰煉は人さし指を自らの唇に当てた。

「ちよつとしたキツカケで、すぐ生まれ変わるものだ、と。たとえば、音楽とか、本とか、人間とか、そんなものと運命的な出会いを果たすことで、一気に何かが目覚めて、新しい自分になれるものだ、と思ってたわ。わたしの中にあるモヤモヤしたものや、わたしをぎゅうつと押し付けてるものが、すべて消し飛んでいく、そんな感覚が得られる、と思ってたの」

「それで、色々と試してみたんだね」

「そう。有名な音楽を聴いてみたり、小難しい本を読んてみたり。あとは、芸術関係にも手を出してみたわ。だって、よく芸能人とかが言ってるじゃない？ 『わたしはこの作品と出会えたことで、人間としてひとかわ剥けました』みたいな、そんな感じの。だから、海外のナント力賞をとった映画とか、ベストセラーの泣ける本とか、食い入るように見たりしたの。まったくもって、ムダだったけど」

「あれって、見たあと数時間くらいは確かに効果があるよね」

「見てるうちにしらけてしまわない場合は、そうね」

「厳しいなあ」 削途が吹き出すようにして苦笑した。

「結局、ムダに時を過ごすことになって、その分だけわたしは汚れてったわ。あせって、他のものを手当たり次第に探すことになった。一応、言っておくけど、本当に色んなことをやってみたのよ？」

「話の途中で悪いけど、ひとつ訊いても良いかな」

「すぐに潰煉は許可したのだが、削途が妙にまじめな顔で訊いてきた。」

「潰煉さんが色々と試した中に、恋愛、っていうものはなかったの？ 女の子の定番ものとも言えるし、それに」「削途が、真剣なまなざしを潰煉に向けている。」「その気になれば、きみが恋愛という選択肢を選ぶこと自体に、それほど困難があった、とも思えない。客観的に見て、潰煉さんの容姿はかなり良い部類に入ると思うよ。お世辞ではなく」

潰煉は、片方の眉だけを上げてみせた。

「恋愛、ねえ……」

「自己変革の手段としては、ポピュラーでお手軽なものだと思うけど」

「それはつまり、セックス、っていうことかしら？」

潰煉は声のボリュームを下げようとしなかったから、聞いている削途の方が、思わず周囲を確認してしまったようである。きよろきよろしながら削途が応じた。

「そういう風にとらえてくれてもいいけど……」

潰煉は断固とした口調で訊いた。「あれって、何か意味があるのかしら？」

「……うん、まあ、もともとは、子孫を残すための生殖行為だね」

「それだけ、でしょう？ わたしの同級生にも経験済みの子はいるけど、それがキツカケで、人間として何か変わった、とは思えないのよね」

「……うん、でも、目に見えない精神的な部分で、自信がつくかもしれないよ」

「自信？ あんなもので、精神的に変われるの？ 肉体的な快楽を追求することは、精神的な墮落につながるようにしか思えないけど」

「……うん、たしかに、そういう快楽におぼれてしまう人間も、いるかもしれないね」

「おぼれる？ 的確な表現だと思うわ、それ。おぼれる、っていうのは、ろくなことじゃないでしょう？ お酒におぼれるとか、ギャンブルにおぼれるとか。何かの快楽におぼれるのは、人間としてダ



メになつていく、その良い例だと思つわ

「……うん、まあ、そうだね」

削途は防戦いっぼうのはずだが、どこか好奇心を強く刺激されていたようである。興味津々といった感じで質問を続けてきた。

「じゃあ、セックスを禁止したらどうかな。そういう行為なしの、清く正しいおつきあいだけなら、どうなるのかな」

潰煉は、すうっと目を細めた。「そういうのは、もっとタチが悪いと思つわ」

「良ければ、理由を聞かせてもらえるかな」わくわくした様子で、削途が訊く。

「ひとことで言えば、そういうのは『洗脳』に近いと思つから」「……うん?」

「わたしの同級生にも、そんなおつきあいをしている子がいるけどね。そういう子は、セックスという目的の代価として、別の何かを求めようとするの。おつきあいの結果として、何かしらの形での変化を、無理やりにも手に入れないと気が済まなくなるみたいね」

潰煉は、感情が声に出ないように努力してつぶけた。

「たとえば、男に言われるままに、髪形を変えたり、服装を変えたり、しゃべり方を変えたりする。それで『彼の色に染められちゃったわ』なんて言つて、喜んでるの。そういう変化が、おつきあいによつて得られた重要な結果だ、と信じ込んでるのね」

「それが、『洗脳』だと?」

「だつて、自分自身を、他人の思つがままに作りかえていくのよ?

あれを『洗脳』と呼ばずして、何と呼ぶわけ? それに比べたら、まだ猿のようにセックスしている方がマシだわ」

「ふむ、『作りかえていく』か。なるほどね、その発想はなかったかな」

「だいたい、男の方にしたつておかしいじゃない。その女の子が好きなら、もともとの、ありのままを好きになれば良いのに、あれこれ口を出して改造するわけでしょう?」

「それは人間としてよりも、動物の雄としての、支配欲求のあらわれなんじゃないかな」

「理由なんて、どうでもいいわ。大切なのは、実際にはメリットがない、ということなのよ。だから恋愛は、その子にとって『洗脳』というより『宗教』に近いのかもね。『恋愛教』に入信して、言われるがままに、自分の姿や考え方を変えてしまう」

「潰煉さんのお話を聞いてみると、『依存』という表現もあてはまりそうだね。つまりセックスという肉体の快楽に依存するか、従属という精神の快楽に依存するか。恋愛は、そのどちらかにならざるを得ない、と潰煉さんは考えているわけだ」

「……あいかわらず、削途さんはまとめるのがうまいわね」

「うん、どうも。まあ、ただ、ぼくは理屈っばいだけだよ」削途が微笑する。「さて、脱線させてしまったぼくがいうのも変だけど、そろそろ話を元に戻そうか。さっきの続き、最終的には禁忌に踏み込むしかない、と考えた理由を訊いても良いかな？」

潰煉は、恋愛がらみの話で感情的になっていることをすこし自覚していたので、削途のつくってくれた流れに乗ることにした。ひとつ深呼吸をして、自分の考えを整理する。

「……それは、色んなことをやってみて、ダメだったからよ。軽く叩いてもだめなら、もっと強く叩きつけるしかないわ。より強い刺激を与えるしかないでしょう？」

「シンプルだね。そういう理由、ぼくは好きかな。単純なものこそ、本質があるから」

「ありがとう。ああ、ただし刺激って言っても、ドラッグとかお酒とかは当然ダメよね。自分を生かすための変化を求めているのに、結果的に自分の体や精神を壊してしまっっては、何の意味もないもの」

「相手を壊すのは、構わないんだね」削途がほほ笑む。

「わたしが壊したいのは相手の生命だけよ、それも同意つきでね。」

さっきのサディストみたいに体を壊すことに興味はないし、どこぞの宗教みたいに精神を壊すことにも興味は無いわ」

「それじゃ、もうすこしつつこんだ質問。禁忌の中でも、あえて『殺人』というものを選んだ理由、それを訊いても良いかな」削途の目が、すこし真剣なものになる。

「うん、そうね……。いわゆる禁忌と呼ばれていて、それでいて役に立ちそうなものは、そう多くはないと思うの。黒魔術とか暗黒儀式、なんていうのはあまりにも非現実すぎるでしょ？ ネクロフィリアとかカニバリズムなんていうのは、ただグロテスクなだけだし」  
潰煉は、削途の前で両手を広げてみせた。

「それに、殺人には実績があるわ。歴史上の人物で、人を殺したことがあるけれども、立派な業績を残したひとつで、かなりの人数がいるもの。昔の英雄なんて、みんな人殺しでしょ？ むしろ、数多くの人間を殺したことを自慢して、さらに周囲に評価されている人だっているくらいだわ。だから、殺人は必ずしもマイナスではないと思うの。そういう点も考慮して、わたしは決めたのよ」

「『実績』か、いいね、それ。理屈っぽいばくは、そういう実際の結果にもとづいた考え方に弱いんだ」削途が、うんうんとうなずくと、穏やかに微笑んだ。「どうもありがとう。少なくとも、潰煉さんが今までしてきたことと、その思考経過はわかったよ。とても、興味深かった」

潰煉も、微笑みを返した。そして自分のティーカップを持ち上げて、その中身がすでになくなっていくことに気づいた。代わりに水を口に含んで、そつと周囲を見渡す。

いつの間にか、ずいぶん時間が経っていたようだった。店内の学生服の数は、だいぶ少なくなっている。窓越しに見える光景も、茜色に染まりはじめていた。

「今日は、こんなところかな」

そう削途がつぶやいて、潰煉も大きくうなずいた。

頃合いだ、という感覚がふたりの中で一致していた。だが削途が伝票に手を伸ばしたので、潰煉はその手を慌てて押さえた。ふたりの手が重なる。

「まって、それはダメよ。対等な関係でいたいから、ちゃんと自分で払うわ」

「ありがとう。じゃあ、あとで清算しよう。ここはぼくが払っておくよ」

潰煉は嘘偽りなく驚いた。「どうして？　こんなところで見栄をはるの？」

「そうじゃないよ」

削途が静かに首を振った。

「さつきから見ている限り、このお店にいた男女のカップルは、ほとんどが男の方が支払っていたんだ。今ここで割り勘にするのは、ちよつと不自然なカップルだと認識される可能性が高いね。不審な行動を起こして目立ってしまったって、店員に顔を覚えられたりするの  
は、得策ではないよ」

潰煉は、削途の言葉の意味をすこし考えたあとで、笑みを浮かべた。「気をつかってくれてるのね、ごめんなさい」

「まあ、ぼくは消える方だから良いけど、きみは残る方だから、証拠のたぐいは残さないように注意した方が良いね」

ふたりは手を重ねたまま、二言三言、言葉を交わした。

具体的な『実行の手法』については、他人に聞かれては困るから、偽名のフリーメールアドレスを使って相談すること。そして、そのメールは削除して一切の記録を残さないこと。携帯電話は、通話履歴などの情報が残りやすいから使わない。

ごく自然にふたりの意見が一致して、使い捨てではないメールアドレスを交換した。

店を出て清算を済ませたときには、ふたりの間には不思議な空気が漂っていた。

「潰煉さん、きみになら、殺されても良いかもしれない」

「削途さん、あなたをなら、殺しても良いかもしれない」

ふたりはお互いに微笑みあった。

喫茶店を出てから、ふたりは人通りの少ない小路を、肩を並べて歩いた。

別れるのが忍びない、そんな奇妙な感情が潰煉の中にうずまいている。前途も黙ってついてきているところをみると、同じ感情を抱いていたのかもしれない。

それは、お互いに心中の秘密を暴露しあつたからだろうか？

それとも、壊されるために築いている関係で、いつか終わりがくるから、一時的に感傷的になつていただけなのだろうか？

そのあたりを、うまく自分の中で整理できないまま、潰煉はゆっくりと歩き続けた。

もう少しこの時間を続けたいところだったが、それでも、駅へと続く大通りに差しかかったところで、ふたりが視線を重ねた。ここから先は人通りが多くなる。一緒に居るところを見られたくないので、このあたりが限界だろう、とふたりは同時に思った。

ところが、別れのあいさつをしようとしたところで、大通りの道近く、ガードレールにもたれているひとりの女の子が目に入った。

別に頃志摩潰煉も贅望削途も、好きで見えていたわけではない。

目に飛び込んでくる、といった方が正しかったかもしれない。

上半身は、ひらひらとした白のブラウスに、黒っぽいライダースジャケット。下はショッキングピンクのホットパンツに、茶色のウエスタンブーツ。髪は、高く結び上げているように見えた。あまりこのあたりでは見かけない、ちぐはぐなひどいファッションである。おまけに女性にしては背が高いので、よく目立つ。

潰煉は無言のうちに見つめていたが、その女の子が不意に飛び上がるようにして向き直り、こちらへと歩いてくるのがわかった。ほとんどふたりの方に近づいてきて、思わず潰煉は半歩下がってしまったが、女の子は容赦なく接近して、あげくに声をかけてきた。

「こんにちは、ちょっと訊きたいんだけど、いいかな、ね？」

潰煉は周囲に目を向けたが、近くに他に人は居ない。困ったことに、潰煉たちに声をかけてきたようである。

仕方なく潰煉は応じた。「わたしたちに、ですか？」

「そ、他に人、いないでしょ？　すぐ済むから。ね？」女の子が、ちよこんと首をかしげて、髪の毛がふわりと揺れた。

潰煉はその女の子を観察する。

目鼻立ちはかなり整っていたが、美しいというよりは、どちらかというと可愛らしい、という印象を強く受けた。遠目には年下か同年代の少女のように見えたが、近くではそうでないことがわかる。肌の質感から、すこし年上の、十代の後半あたりかと思われたが、正確な年齢が読みとれない。なにより話し方がはきはきとして大人びていて、そのファッションセンスとのギャップを強く感じた。

「仏滅東公園って、どこにあるか知らない？」

いきなり訊かれて、潰煉は一瞬返答につまった。

潰煉の記憶がまちがいでなければ、その公園は、一週間ほど前、例の連続殺人事件の、四件目がおこった現場だったからだ。報道や警察の関係者には見えないが、こんな女の子が、わざわざその公園に行きたい、というのはどういふつもりなのか、その意図がわかりかねた。

「ここからだ結構歩きますよ。隣駅からの方が近いです」潰煉に変わって、削途がおっとりとした声で答える。

「あ、そうなの？　仏滅町にあるんだ、と思ってたけど」

「たしかに公園自体は仏滅町にありますけど、町の東の端っこなんです。梅毒町との境にある感じですから」削途がどこまでも冷静に受け答えをしている。

「歩けない距離？」

「結構かかりますよ」

「じゃ、簡単に良いから、道を教えてくれない？　おねがい、ね？」ポニーテールとは良くいったものだ、と潰煉は思った。女の子が

『ね?』と言って首を少しかしげるたびに、まるで本物のしっぽのように、ふわふわと上下左右に髪の毛が動くのだ。

削途が身振り手振りをまじえて、道順を説明している。女の子は頭のしっぽを揺らしてうんうんとうなずいていたが、説明を聞き終えるにつこりと笑った。

「良くわかったわ、どうもありがとう」女の子は両手を胸の前で組んだ。袖の短いジャケットから、ひらひらしているブラウスの飾りがのぞく。「あたしは馬骸美裂、よろしく」

「はあ……」

「デートの最中だったのに、邪魔しちゃってごめんなさい」

「いえ、別にそういうのじゃ、ないですから」潰煉はすこしむっとして答えた。

美裂が、ふたたびにつこりと笑った。「そう? でもさっき、あなたは『わたしたち』って言ったもんね。つまり、ふたりで一組ということ。そうでしょ、ね?」

小首をかしげてみせると、潰煉の返答を待たずして、美裂は大きく腕を振りながら長い足を動かすと、公園へと向かって歩き始めた。ブーツがアスファルトとぶつかる、小気味よい音が遠ざかっていく。潰煉は引きつった顔のまま、しばらく動けなかった。

「見られたのは、ちょっとまずかったかな」削途がぼつりとつぶやく。

潰煉はようやく自分の表情を取りもどした。

「どついう意味? まさか知り合いな?」

「いや、ちがうよ。ぼくが言いたいののは、誰であれ、ふたりで居るところを見られない方が良い、という意味だよ。証拠は残さない方が良いから」

「あの女の子、あの事件現場の公園に行きたいなんて、いったいどついうつもりなのかしら。何かの関係者には見えないけど……もしかして野次馬?」

「野次馬に行くなら、普通の女の子ならひとりでは行かない、と思

うけれど。まあ何にせよ、見られたものはしょうがない。今後は気をつけるようにしよう」

前途の声にうなずきながらも、潰煉は馬骸美裂の顔を脳内に記憶した。彼女とはふたたび会うことになる、そんな奇妙な予感をうっすらと感じていたからだ。



贅望前途と別れたあと、頃志摩潰煉は、駅へと続く道をひとり歩いていった。

普段は見慣れない、夕日に照らされた町並みをながめながら、ゆったりとした足どりを保っている。喫茶店に行くときは誰かに見られるのが心配だったが、面会が終わった今となっては、それほど気にならない。この駅の近くの繁華街にある、どこかのお店に用があった、そんな嘘をつけば済むことだったからだ。

ちようど会社が終わる時間と重なったようので、駅前通りにはスーツ姿の人間がちらほらと見受けられた。

疲れた顔で、黙々と駅へと急ぐひと。

仲間たちと連れ立って、飲み屋へと向かうひと。

携帯電話で話しながら、しきりに頭を下げているひと。

ひと。ひと。ひと。それはいわゆる、大人と呼ばれる人間たちだった。

潰煉は目を細めて、そんな大人たちを見つめていたが、やがてゆっくりと首を振った。どの大人を見ても、自分の未来と重なることができなかったからだ。

くたくたになるまで、仕事に根をつめる自分。

同僚との付き合いに、興じることのできる自分。

会社が終わったあとでも、熱心に仕事にはげむ自分。

将来、あんな風になる。あんな感じに行動できる。それが、潰煉にはまるで想像できなかった。まるで、別世界のできごとのように思えた。

不意に、すぐ近くからかん高い笑い声が聞こえてきて、潰煉はそちらへと目を向けた。

放課後から今まで、どこかで遊んでいたのだろうか、学生服姿の一人団がふらふらと歩いている。彼らが、横一列になってこちらに向か

ってきたので、潰煉は建物に寄り添うようにして道をゆずった。

女子学生のひとりが、一瞬だけ潰煉に視線を向けたが、すぐに、何もなかったように談笑に戻っていく。見た目から、高校生らしい、とわかった。それはつまり、潰煉と同じ身分の存在ということになる。

だがしかし、彼らと同じように振舞うことができる、とも潰煉には思えなかった。

潰煉は考える。

大人と繋がりがなく、普通の学生とも異質である今の自分は、はたして何者なのだろうか、と。

急に、孤立感と疎外感に背中をそつとさすられて、潰煉は思わず身震いした。

そもそも、潰煉には高校での友だちが少ない。それは部活に入っていないかつたせいもあるだろうが、多分に自分自身の精神構造のせいもあるだろう、と潰煉は考えていた。

中学校の頃は、今のようではなかった。それは、潰煉もはっきり覚えていた。

他の学生と同じように、テレビのドラマの話で盛り上がりたり、テストの点数を比べてくやしがつたり、好みの異性の話で盛り上がりたり、友だちとケンカして落ち込んだり、ささいなことに一喜一憂していた。

もつと、感情をあらわにしていた、と潰煉は思う。ときおり、社会の仕組みに苛立ちを覚えることはあっても、今ほど神経質にはなっていないかった。

なぜだろう、とか、おかしいな、と感じ、それを口にするのは数多くあっても、それらを内にこもらせることはなかった。自分の心の中で、ぐつぐつと煮えたぎらせることはなかったのに……。

いつからそうなったのか、どうしてそうなったのか。まったくわからない。

自分自身に起こっている変化を、潰煉はつかみそこねていた。

潰煉は、中学の頃にくらべて、そこそこ背は伸びた。あまり嬉しくないが、体重も重くなった。期待したほどではないが、胸も大きくなった。では、心は？ 精神は？ 大きくなっただろうか。それとも、もろくなったのだろうか。あるいは、汚れてしまったのだろうか。

『自分自身の個性とか、自分特有の感性とか、そういうものが失われていくこと、それを恐れているんだね』

『妥協すること、甘受することが、受け入れられないみたいだね』  
ふっと、削途の言葉が心の中に浮かびあってくる。削途は驚くほどの確に、潰煉の悩ましい心情を言い当ててみせた。削途の、透き通った瞳。あの目には、いったい自分はどう映っていたのだろうか、と潰煉は思う。

「ねえ、ひとり？」

いきなり声をかけられて、潰煉は自分が駅についていたことに気がついた。

「どう？ これからお茶でも飲まない？ いい店知ってるんだけど。それとも、一緒にどこか遊びにでも行こうよ。それがいいって」

声の主は大学生くらいの男だった。自分の容姿に自信があるのか、それとも手馴れているのか、男は当然のような顔で潰煉の行く手をふさいでいる。

しかたなく潰煉は立ち止まると、男を見返した。茶色の長めの髪は無造作にアレンジされていて、耳には銀色のピアスが光っている。顔立ちはまあまあだったが、そんなことは関係ない。潰煉は、この手合いがとにかく嫌いだった。特に、潰煉は男の目が気にいらなかった。奥の方まで濁りきっていて、表面にはキラキラとした油膜が浮かんでいる。

その脂ぎった目が、潰煉の顔から胸へ、さらに下腹部へと舐めまわすように移動して、つま先までいって顔に戻ってきたところで、潰煉は我慢ができなくなった。

「あなたみたいなひとはね」顔を近づけてきた男の、その目を見す

えて言う。「生きる価値がないから、さっさと死ねばいいのよ」  
「はあ？」

男は潰煉の言葉の意味が理解できないようだった。

「あなたには、羞恥心のかけらもないわ。よくそんな自分を許せるわね。生きていて恥ずかしくない？それが理解できないわ。何の目的もなく、何の理想もなく、何の信念もない。あなたみたいな汚れた精神の持ち主はね、すでに精神的に死んでいるようなものよ」

男の顔が引きつるのも構わず、潰煉は続けた。

「なんなら、わたしが殺してあげましょうか？その汚い目玉をえぐりとって、口の中に押し込んで窒息させてあげるわ」

あとずさりする男の横を通り抜けると、潰煉は首を振りながら改札へと向かった。もう一度口の中でつぶやく。

「理解できないわ」

家に帰った頃志摩潰煉は、出迎えた母親の相手もそこそこに、自室に入って着替えるとすぐにパソコンを立ち上げた。お目当ては、贄望削途と知り合った掲示板である。

もちろん、そのURLはブラウザのお気に入りなんかに入れていなかったし、閲覧した履歴も毎日消去していたから、いきつけのその掲示板を表示するには、必要な英数字を手打ちする必要がある。すっかり記憶しているアドレスを打ち込むと、目的地へとたどりつく。

潰煉は、掲示板のチェックだけは毎日おこたることなく続けている。

なにしろ『陰惨市内で殺人者募集!』などと、大きなフォントのゴシック太字で書かれているアングラな掲示板だから、目を付けられないようにしよっちゅう移転するのだ。

それはもちろん人目をごまかす意味もあったのだろうが、遊び半分で書き込む輩を置いてけぼりにする意味もあったのだろう。潰煉は、現在の掲示板の運営方法に、とくに不満は感じていなかったし、それに『殺し』に対する熱意は、誰にも負けないつもりだったから、ある種の試練、ともいえる頻繁な移転は、むしろ望むところだった。夕食前に簡単なチェックをしよう、そう思っていた潰煉の手が止まったのは、その掲示板で起こっていた、ちょっとしたお祭り騒ぎのせいだった。

速報。また、あの犯人がやらかしたらしい。これで顔なし全裸死体は五人目、殺しの間隔も短くなってる。興奮するね。

マジかよ、情報はやすぎだろ。ニュースでも何もやってねえよ。

マスコミからも警察からも同じ裏情報がきてる。まず間違いない。

場所、どこ？

墮胎駅から近い公園。

いままでの事件現場にわりかし近いな。やっぱ同一犯？

死体は素っ裸で、顔がないらしい。模倣犯かもしれないけど、警察は同一犯として初動捜査してるっぽい。報道規制も出てるし。

あ、いまニュース速報はいった。テレビつけてみ？

潰煉は思わずリモコンに手を伸ばした。自室のテレビにうつるニュースキャスターが、慌てた様子で原稿に目を通して見えているのが見える。

当のキャスター本人は、混乱と驚愕とを必死によそおっているのであろうが、その仮面の下からは、興奮と高揚が滲み出ている。きっと、こんなショッキングなニュースを一番に読める幸運を、神かなにかに感謝しているにちがいない。

《速報です。ただいま速報が入りました。先日もこの番組で紹介した連続殺人事件ですが、新たな被害者の遺体が発見されたもようです。くりかえします。陰惨市内で起こっている連続殺人事件で、新たに被害者の遺体が、梅毒駅近くの公園で、発見されたもようです。このニュースに関しましては、今後も情報が入り次第、番組内で紹介いたします。》

潰煉はしばらくその番組を見ていたが、まともな情報が入ってくる気配はなかった。

どうせそのうち、《死体は損傷が激しく身元の判別が困難》とか《現場の状況から同一犯と推定される》とか、このところの決まり文句を並べるだけなのだ。

一方、潰煉が見ているこのアングラ掲示板では、以前から『死体は全裸で顔面が破壊されている』という情報がリークされていた。

もちろん、どこまで真実なのかは怪しいのだが、書き込まれる内容がときとあまりに生々しいことや、今回のように、ニュース速報よりも早いリークが何度かあったことから、その情報の信憑性はかなり高いのではないかと潰煉は考えていた。

恍惚としているキャスターの顔を見ているも仕方がないので、潰煉はパソコンの画面に視線を戻す。

報道規制ひどいな。正直に言えばいいのに。全裸で顔面がつぶされてる、ってさ。

つか、それだとパニくるだろ、一般市民が。

一般人なんてどうでもいいだろ、俺たちに関係ないし。

そうでもない。自警団を組織するとか、集団下校の開始とかされたら、俺らだってやりにくくなるだろ。

集団下校って、お前まだ小学生ねらいかよ。この変態ロリコンめ。

うるせえな、だったらてめえはババアでも殺してる。

ケンカすんなよ、それよりマジモンの続報ないの？

無理。今回は警察がはやすぎ。あつという間に締め出された。現場が署から近いところだったし。ただ、人通り少くないから、目撃証言はそのうち集まると思う。

リークよろしく。小出しでもいいから。

潰煉にとっては残念なことに、このアングラ掲示板でも、期待したほどの詳細な情報は入ってこなかった。

それでも、梅毒町の繁華街には何度か行ったことがあったから、駅近くの公園と言われて、いくつかの場所が潰煉の頭に思い浮かんだ。

さつき署の近く、と書き込みがあったから、地図で所轄署近くの公園を調べてみるのも良いかもしれない、それともいつそ、自分で梅毒駅まで行って、状況を確認してみよう、とも潰煉は考えた。

そこまで思案したところで、潰煉は苦笑した。自分はいつたい、何を熱心に考えているのだろうか、と思う。他人の仕事ぶりを眺めていても仕方がないのだ。自分のなすべきことをしなければいけない。首をふりつつ、掲示板の斜め読みをしていた潰煉の目に、血のような赤色をした書き込みが突如として飛び込んできた。

管理人 そば茹でました。

潰煉の手が、自然とメモ用紙を探し始める。まるで写真機のように一瞬で記憶できれば良いのだが、残念なことに、潰煉は手でくりかえし書かないと覚えられない性質だった。

この状況でいきなり茹でんな。ってか、ここんどこ茹ですぎじゃね？

引越しそば、もうできあがったの？ 俺、あしたは忙しいから、移転先を表示するなら今日中でよろしく。

管理人 そばの配布は二十一時から。

その赤字を見て、潰煉は小さく安堵の息をついた。そばが茹でられるのは掲示板の引越しの合図である。夜の九時以降に表示される掲示板の移転先をチェックすれば良いのであるから、どうやら、掲示板難民にならずに済みそうである。

律儀なことに、移転先のアドレスは二十四時間しか表示されないし、同時に、すぐに古い掲示板は削除されてしまうのだ。だから潰煉は掲示板を毎日チェックしているのだが、一回だけギリギリだったときがあり、それ以来すこし神経質になっていた。

ただ、今となってはそれも取り越し苦労かもしれない。この掲示板を贅望削途も見ているはずで、うっかり潰煉が迷子になっても削途に訊くことができるだろう。

もちろん、削途を殺さない限りにおいては、だが。

そんなことを考えていた潰煉は、ふと気になって、メールを確認した。証拠を残さないために、約束通りフリーのメールサービスを使用する。受信が一個あるのを発見して、わきたつように潰煉のころはときめいた。以心伝心、そんな感じがしたからだ。

『 K・K・へ。』

今日は会えてうれしかった。ぼくが初対面の人を相手にあそこまで話せるのは珍しい。一方的だけど、相性の良さを感じている（そのことは、きみにはあまり意味がないかもしれないけど）。また会いたい、と思った。時間に余裕のあるぼくのがままでから、聞き流してくれて構わない。ところで、ちょうどぼくたちが会って



いる間にまた事件が起こったみたいだね。ぼくたちが実行するとき  
は、地元から離れた場所を選んだ方が良さかもしれない。それでは、  
また。 N・S・より

補足 このメールに心当たりのない場合は、その旨ご返信く  
だされば幸いです。』

どこか淡泊な文面から、潰煉は削途の口調を想像した。最後の一  
行も物事に慎重な彼らしいと思われる、潰煉は知らず知らずのうち  
に口元が緩んでしまう。削途に余計な心配をさせないためにも、す  
ぐに返信をした。

『 N・S・へ。』

まずはじめに、アドレスは合ってるので安心して。わたしも  
また会いたい、と思ってるわ。今日は、思ってたことをうまく言え  
なくて残念だったから。柄にもなく緊張してたのかもしれないけど、  
さあ、どうかしら？ 本当は電話が使えれば良いんだけど、メール  
よりも証拠が残りやすいからダメね。地元で起こっている例の事件  
は、もうすこし静観するつもり。じゃね、ばいばい。 K・K・  
より

補足 このメールは一分後に自動的に消去され、ません。手  
動で消してね。』

送信後に、二つのメールを何度も読んで頭にたたきこむと、潰煉  
は宣言通りにメールを削除した。ゴミ箱からも完全に削除して、証  
拠を隠滅する。

天文学的な確率で大当たりでもしないかぎり、サーバ管理者がこ  
のメールをチェックしたりはしないであろう。携帯電話などと違っ  
てすぐに個人が特定されないのが、この手法の大きなメリットであ  
る。

そもそも携帯電話は、契約するとき親の同意書が必要なので面倒  
だし、加えてプリペイド型の携帯電話の規制が、こここのところ急に  
厳しくなったことは痛恨事だった。振り込め詐欺の連中のせいで、  
自分のような無害な人物が迷惑するのだ、と潰煉は憤慨した。

その直後に、漬煉を呼ぶ声が階下から聞こえてきた。漬煉にとつては、家事をするしか能のない中年女が、どうやら夕食の準備を済ませたようである。舌打ちしつりビングに向かった漬煉に、母親が声をかけた。

「もう、冷めちゃうから呼んだらすぐにきてよね。それにね、普通は漬煉くらいの年頃の女の子は、お夕飯の準備とか手伝ってくれるものよ。お隣の琢美ちゃんなんか、お料理も上手で、時間があるときははいつつもお夕飯の手伝いを……」

途中から、漬煉は聞いていない。母親の話はいつもこうだ。『お隣の　　ちゃんは、お向かいの××ちゃんは、漬煉の同級生の　　ちゃんは』ではじまり、『漬煉とちがつてちゃんと　　している』で、締めくくられる。まったく意味のない比較だ、と漬煉はいらだちを見せたが、母親の方は自己満足のお説教を続けていた。

「お母さん、漬煉のことをちゃんと育ててきたつもりなのに……。それが、どうしてこんな風になっちゃったのかしらねえ」

『だったら、わたしを殺して、その子を養女にでもすれば？』  
そう言い返してやりたいのを、漬煉はかなり本気で我慢した。結局のところ、母親の言い分は『自分の育て方は悪くなかった、だから自分以外のものが悪いにちがいない』ということなのだ。贅望前途の言葉を借りれば、まさに他責の考え方にあてはまるだろう。

漬煉は、母親に気づかれぬようにして大きく息を吐きだすと、肩の力を抜いた。こういうものを、真正面から受け止めてはいけないのだ、と自分を説得する。

聞くな。無視しろ。受け流せ。  
繰り返し、漬煉は自分に言い聞かせる。そうでもしないと、物事が悪い方向へと進む。

悪いというのは、別に母親とけんかをするのではない。

そんなことは、問題にならない。

本当に、つらく、厳しく、そして恐ろしいのは、自分が汚染されてしまうことなのだ。

『だいたい、わたしがこんな風になったのは、母親の育て方が悪かったせいでしょう？』

そういう、自分の責任を放棄するような方向へと、つい考えている自分に気がついて、潰煉はぞっとする。そうなってしまえば、母親と同じ、他人と自己とを比べて、自分以外のものに責任をおしつけるだけの、他責人間に堕ちてしまう。

それは不治の病に近い、と潰煉は思っている。現に潰煉の母親は、その病が進行することはあっても、まったく治る気配がなかった。

だから潰煉は取り合わない。聞かず、無視して、受け流す。

今だって、なま返事でやり過ごして、無表情をつらぬいてみせるのだ。

潰煉は箸を取りつつ、心に誓った。

できるだけ、削途を早くに殺さないといけない、と。

翌日、登校した直後に、頃志摩潰煉は友人につかまった。

「ねえカレンちゃん、き、きのこのニユース、見たあ？」震えた声で言った已足内心は、自分より小さな潰煉の腕にしがみついて離れようとしなない。

「どのニユース？」潰煉は、げんそうな声を出したが、すぐに自分で気づいた。「ああ、例の連続殺人犯のやつ？ そういえば、心が昨日なんか言ってたっけ」

「今度はまさに地元だよお、カレンちゃん。墮胎駅だって、毎日学校へ来るときに通ってくる駅だよお？もしかしたら昨日の帰りにハンニンと会ってたかもしれないんだよ？ ココロこわいよお」つかまれている腕越しに、心の震えが潰煉にまで伝わってきた。

「たしか、昨日は……結局、新しいお店にひとりで行ったの？」

「ううん、行かなかったの、怖かったから。でも、それが正解だったかもお」心が、潰煉の腕をつかむ力が強くなる。

子犬のような目で見つめられて、思わず潰煉は苦笑する。

「しばらく、放課後はまっすぐ帰った方が良いんじゃないかしら」

「でも、あのお店は行ってみたいよお」

我慢できずに潰煉は吹き出した。「どっちなのよ。怖いのか？ それとも行きたいのか？」

「うーんとね、両方なの。だからさあ」心は潰煉に体をすり寄せてきた。「カレンちゃん、一緒に行こお。そうしようよお。今週だったら、いつがあいてるの？」

そう訊かれて、潰煉は真剣に考え込んだ。贅望前途のひどく透き通った目が、自然と頭の中にイメージされていく。

「予定が入るかもしれないから、調べとくわ」

「予定？もしかして、男の子お？」心が、すこし表情を変えた。

「ちがうわよ」潰煉は首を振りながらも、心の勘の良さにいささか

驚いていた。「親がうるさいから。ほら、来週には英語の小テストとかもあるし」

そう答えてから、潰煉はいささか自己嫌悪におちいった。知らず知らずのうちに、親という他人の責任にして、大事な友人の願いをごまかそうとしている自分に気づいたからだ。

「ああ！ 英語の小テストあるの、忘れてたあ。全然勉強してないよあ」

心が友人の腕を開放して頭を抱え込んだので、潰煉は気づかれなように、そつとため息をついた。

それと同時に、担任教師の暗規止締乃が教室に入ってくる。一時間目は彼女が担当する英語の授業ではないので、教室の中にいたクラスメートたちがざわつきはじめた。

「今から臨時のホームルームをします。席に座って、さあ早く」

クラスメートのひとりが言う。「せんせーい、もしかして、今日は一限の授業はないの？」

「いいから早く座りなさい。もう予鈴は鳴っているのよ」暗規止が、外見通りの神経質そうな声を出した。

まだ二十代前半なのに、いまだき珍しい、古くさい格好の教師である。地味なスーツ、丁寧にまとめられた髪、黒縁のメガネ。絵に描いたような『女教師』だった。それは態度にもあらわれていて、いかにもおかたい教育者、といった高尚な雰囲気<sup>レキョウキ</sup>を常にただよわせている。

クラスメートの男子の中には、暗規止の『ド』と、締乃の頭文字の『S』とを合わせて、『ドS』などと呼んでいる輩もいたはずだった。

悪くないあだ名だ、と潰煉は感じている。

態度を見る限り、暗規止は少なくとも生徒に媚を売る気はないらしい。そういう意味では、潰煉は暗規止という人間をプラスの方向に評価していた。生徒にへつらう教師は最低だ、というのが、潰煉の正直な感想である。

その『ドS』が、おもむろに口を開いた。

「もう知っていると思うけれど、昨日、墮胎駅から近い公園で事件がありました」

暗規止が、メガネの位置を直しながら続ける。

「念のために確認しておきますが、例の連続殺人事件です。元々、陰惨市内で繰り返されていた事件なので、まったく注意していません。たわけではないけれど、昨日の事件現場があまりにも近かったので、学校側としても見過ごせない事態になってきました」

そこでいったん言葉を区切ると、暗規止はプリントを配り始めた。それに目を落とした潰煉の視界に、『登下校時における注意』『放課後における注意』などといった語句が飛び込んでくる。

潰煉もほかのクラスメートと同様に、半笑いでそのプリントを眺めていた。正直なところ、間抜けにも殺される方が悪い、というのが本音だったし、他のみんなもそう考えていたにちがいがなかった。

「せんせい、ちょっと大袈裟じゃねえの？ だいたい殺されたの、この学校の生徒、ってわけじゃねえし」ガタイの良いクラスメートの男子が、ぶつきら棒な声を出す。

「そういうわけには行きません。みなさんの安全のためには、必要なことです」

「はん、どうだかね。誰かに何か言われたんじゃねえの？」

「ある意味では、その通りと言えないこともないわ」

暗規止は、その男子生徒の方に勢いよく向き直ったが、きれいにまとめられた髪はまったく揺れなかった。

「実は、とある保護者の方から、この事件に関する学校側の対策について、問い合わせの連絡がありました。加えて、教育委員会から連絡があったのも事実です。そういうことも含めて、職員会議で話し合いが行われ、全クラスでこのホームルームをすることになりました」

男子生徒は、鼻をならして唇をねじまげてみせた。「どうせ、外に向かってアピールしたいんだろ、何かあったときのために」

「そういう風に考えてもらっても構わないわ」

暗規止は毅然とした態度を崩さず、どこまでも真面目に自分のペー  
ー守っている。

「ただ、もしかしたら事実を知らない生徒がいるかもしれないし、  
手を打たないでいたら大変なことになるかもしれない。後悔はした  
くないので、必要なことはしておきます。あなたたちは、きちんと  
自分の判断で行動してください」

潰煉は、暗規止にプラスの評価を上乗せしていた。

たしかに、外部から言われて嫌々やっているの、自発的なホー  
ムルームではない、のかもしれない。だが、そのこと自体を生徒に  
隠そうとしなかったし、良くも悪くも、生徒を子ども扱いすること  
もなかった。猫なで声で接されるよりは遙かにマシではないか、と  
潰煉は思う。

その後、失笑と半笑いが支配する教室の中で、プリントが読み上げ  
られた。できるだけひとりで登下校しないこと、放課後は寄り道し  
ないで家に帰ること。そんなありきたりの内容が繰り返され、生徒  
たちに確認される。

ふと気になって、潰煉は心を見た。お目当てのお店に遊びに行け  
なくなりそうなので、きつと顔の下半分を膨らませているのではな  
いか、と思ったのだ。

だが心は意外にも無表情で、自分のキャラクターものの腕時計を  
眺めていた。

それを見た潰煉は、ごくわずかに首をひねった。

最後の授業が終わってから、学校はささやかなトラブルに包まれた。部活動がしばらく休止されること、が決まったからだ。多くの生徒が文句を言っていたが、特に試合が近い運動部の生徒たちは、かなり抵抗していた。運動着に着替えて自主練習を始めている者もいて、教師と激しい言い争いになっている。

はたして、職員会議でいったいどんな会話がなされたのであろうか、教師の間でも、意見が一致していないようであり、一部の顧問は自主練習を黙認しているようで、それがまた不公平だ、とトラブルになっていた。

頃志摩潰煉は、帰宅部である。

文字通り、ひとごとのように顧問と部員たちの言い争いを眺めていたが、そこに通りかかった人物が、その光景を目にして足をとめた。気配を感じて振り返った潰煉の瞳に映ったのは、地味なスーツを隙なく着こなしている暗規止締乃だった。

「ちよつと困ったことになっているわね」表情を変えずに、暗規止が口を開く。

その様子を横目で見ながら、潰煉は訊いた。「先生のあいだでも、意見がちがうんですか」

「それはそうでしょう、日本は民主主義の国なんですから。意見がちがって当然です」

「なんですか、それ。暗規止先生、いつから公民の教師に鞍替えしたんですか？」

「先生の言いたいこと、わからない？」暗規止が、首ごと視線を動かした。

潰煉は少し考えると、何かに気づいた。「もしかして、部活動の休止は多数決で決まったんですか？」

「正解よ。これがテストじゃなくて残念だったわね」暗規止が、わ



ずかに微笑する。

「せつかくなんで、英語の評価に反映してもらえませんか？」

「そうね、『多数決』を英語で何というか、答えられたら考えても良いわ」

潰煉は、沈黙で答えた。暗規止が小さく首を振ると、正解は『majority decision』だと教えてくれる。だが視線を部員たちに戻した後で、暗規止が表情をすこし厳しいものに変えた。

「先生の個人的な意見としてはね、問題となっているのは部活動ではない、と思うの」

暗規止は潰煉の視線を受けて、ややためらいがちに続けた。

「生徒が校舎の内部に居る限り、教師としては、生徒を守る義務があるわ。だから安全面においては、部活動をするということは、授業をするということと、ほぼ同じ扱いになる、と先生は考えているの。両者とも、生徒が校舎内に居ることに、変わりはないでしょう？」

「つまり暗規止先生は、生徒が校舎の外に出たときこそが問題になる、と？」

「すこしちがうわね」

暗規止は言葉を切ると、しばらくののち、ためらいを振り払うようにして説明した。

「生徒が学校内に居れば、それは教師の責任。生徒が家の中に居れば、それは保護者の責任。この二点については、明確になっているわ」

「……すると、問題になるのは、登下校時ですか？」

「その通りよ」暗規止が大きくうなずいてみせる。

潰煉は、さぐるような視線を担任の英語教師に向けた。「責任の所在が、明確ではない、ということですか？」

「先生にとつては残念なことに、そうではないわね」暗規止が小さくため息をついた。

潰煉は、演技ではない驚きの声をあげてしまった。「登下校時は、学校側の責任になってしまっんですか？」

「頃志摩さん、『家に帰るまでが修学旅行です』というフレーズ、聞いたことはない？」

それはユーモアのつもりで言ったのか、と潰煉は一瞬だけ疑ったが、どうやら暗規止は真剣に話しているようだった。もし仮にユーモアだとしても、潰煉を笑わせるには、あまりにも声の調子が暗すぎたにちがいない。

もちろん、そんな潰煉の心中に構わず、暗規止が言葉を続ける。

「一般的にいつて、登下校時に何かが発生したときには、学校側の責任になるわ。たとえば、台風が来たときのことを考えてみて。生徒がひどい嵐の中を登校して、もし事故が起こったとしたら、それは休校にしなかった学校の責任？ それとも、登校させた保護者の責任？」

「……電車がとまるほどの嵐のときは、休校にしてほしいですよね」「でしよう？ それに、事故が起こったときの保険会社の取り扱いなどについても、登下校時の事故は、ただ外出したときの事故とは、まったく別の扱いになるのよ」

暗規止の口調は、熱っぽいものに変わりつつある。それは珍しいことであつたので、潰煉は黙って話をきくことに専念した。

「校舎の中であれば、教師の努力で何とかできるわ。でも、校舎の外は広すぎるの。物理的にカバーすることができないもの。だから部活動の休止なんてあまり意味がないのよ。そんなことを職員会議で議論しても何の意味もないわ。本当に考えるべきは、生徒たちの登下校をどう管理するか、なのよ。そのためには当然、保護者たちと協議する必要もあるし」

そこで、暗規止がはつとしたような顔になった。乱れてもいないメガネの位置を直したあとで、潰煉に頭をさげてみせる。

「ごめんなさい。頃志摩さんに話すべきことではなかったわよね」

潰煉にしては珍しいことに、にっこりと笑ってみせた。「興味深いお話でしたよ」

「いえ……そんなことはないわ。どう考えても、先生が愚痴を言っただけですもの……」

暗規止の語尾をかき消すようにして、校内放送が流れた。

緊急の教員会議をするので、教師たちは会議室に集まるように、との内容が二回繰り返される。

暗規止は、無理に笑顔をつくって別れを告げると、潰煉に背中を向けた。その後ろ姿を見つめながら、潰煉はちいさくつぶやいた。

「登下校時が、問題になる、か」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1282ba/>

---

コロシコロサレコロスカヒ

2012年1月13日03時11分発行